

隋唐の医書にみる精神病とその治療

大塚 恭 男

はじめに

中国の医学は前漢中に『黄帝内経』を、後漢中に『神農本草経』を、そして後漢末の建安中に『傷寒雜病論』を生んで、その基礎は確立されたと考えられる。これに続く魏晉南北朝期には、一方では何晏の五石散を始めとする石薬の流行が見られ、他方では西域との交流による外来医学、特にインド系の医学の影響が見られ、複雑な様相を呈するに至る。この時期には陳延之、范汪、葛洪、胡洽、陶弘景ら名医が少からず輩出し、多くの医書が著わされたが、残念なことに殆ど伝えられていない。しかし、幸いなことに唐の王燾の『外台秘要』（七五二）、日本の丹波康頼の『医心方』（九八四）の二書が、この時代の著書を出典をあげつつ、多く引用していることより、そのおよその姿を知り得るのである。

隋の大業六年（六一〇）に成った巢元方らの『諸病源候論』は病因、症候論の歴大な著述であり、精神疾患に関する記載も多く認められ、後代に与えた影響はきわめて大きい。唐代の孫思邈の『千金要方』（六五〇頃）や王燾の『外台秘要』、丹波康頼の『医心方』らはいずれも『諸病源候論』の記載を大幅に引用している。ただし、王燾、丹波康頼は前述の如く出典を明記しているが、孫思邈はそれを行っていない。

本稿を草するにあたり、『千金』か『外台』かのいずれか一つを選択することとしたが、書誌学的な興味においては

『外台』がまさるが、王燾は元來醫師では無く、『外台』にも編者の個性があまりうかがわれない。一方の孫思邈は卓越した臨床家であり、『千金』は多くの先行資料に拠りつつも、著者の強い個性によって構成されているという点に魅力があり、ここでは『千金要方』に基いて、当時の精神病とその治療について考察を進めることとした。

『千金要方』中では、精神科領域の記載の多くみられるのは、「卷第八諸風」、「卷第十一肝臟」、「卷第十二胆腑」、「卷十三心臓」、「卷第十四小腸腑」、「卷第十五脾臟上」、「卷第十九腎臟」、「卷第二十一消渴、淋閉、尿血、水腫」等の各篇である。

「諸風」篇の精神障害

本篇の冒頭において、孫思邈は岐伯を引いて中風の四型として、偏枯、風痺、風懿、風痺をあげている。風とは急性に発症する疾患であり、今いう風邪もその一つであり、『傷寒論』の言う中風はこれにあたるが、今日俗間に言う中風、つまり脳循環障害によっておこる諸症もこれであり、『金匱要略』の言う中風はこれにあたる。

偏枯はその語の示す如く、半身不随であるが言語や意識に障害の及ばない状態を言い、温臥させて、発汗させ、不足を補い、有余を瀉すことよって回復するとあることよりすれば、軽症の場合をさすのであろう。

風痺は疼痛を伴わないが、四肢の運動障害があり、意識障害が顕著でなく、言語がちょっと分り難いという程度であれば治癒可能である。しかし言語不能というような重症例は不治である。

風懿は突然強い意識障害がおこり、人が分らなくなり、喉がつまって舌がもつれ口がきけなくなる。この場合は病が臟腑にあり、始めに陰に入つて、後に陽に入ったものであるから、先ず陰を補つたあとで陽を瀉して汗を出させて体が柔軟になるようなら生きるが、それでも硬直したままなら七日で死ぬ。

風痺は湿痺その他の痺病と類似の症状を示し、身体不仁をおこすので鑑別を要する。

諸風の治療の原則はその初期に統命湯を与え、輪穴に灸治を行うことであるとす。

この病態は多様であるが、たとえば、「風年才を歴て、あるいは歌い、あるいは哭き、大笑し、言語及ばざる所なし」というような情動失禁を示す例もあげられている。この例では小統命湯の適応とされている。

小統命湯は本篇中に三種の同名異方が記されているが、これら三方に共通している生薬は麻黄、桂心、甘草、生姜、人参、芍薬、防己、芍薬、黄芩の九味であり、問題の条文中に与えられた小統命湯は以上のほかに当帰が加えられたものである。

「肝臓」篇の精神障害

「肝は血を蔵し、血は魂を舎す。悲哀し、中を動かせば則ち魂を傷つく。魂傷つけば則ち狂妄して、その精守られず」とあるように、この篇でもある種の精神障害に言及している。

例えば、「肝実熱、夢怒虚驚す」とあり、治療として防風煮散が与えられており、また「肝邪熱、言を出だして常に反し、たちまち急、たちまち緩」とあって遠志煮散が与えられており、「邪熱肝を傷つくれば、好んで悲怒を生じ、所作定まらず、自ら驚恐す」とあって地黄煎が与えられている如くである。

記載があまりにも簡単で、これらより特定の疾患を考えることは困難であり、また治方にも定準がみられない。

「胆腑」篇の精神障害

胆と心気症、鬱状態との関連は東西古代医学に共通に認められる。西洋でも東洋でも古代にあっては胃と心臓に交通があったと考えられていた。營々と働き続ける心臓は胃から絶えず栄養を供給されねばならない筈であった。心臓に近い胃の部分をカルディアと称するのはその名残りである。そして過剰の黒胆汁メラノコレが心臓に流入した場合に鬱状態メラノコレをおこすし、

心気症をおこすと考えられていた。中国でも、例えば元の戴思恭の『証治要訣』に「胆涎、心に沃ぐ。以て心気不足を致す」とあるように病的な胆汁が心臓に流入することによって鬱状態ないしは心気症をおこすという考えが行われていた。

本篇には鬱状態、心気症に関する記載とその治療法が記されている。実例を示そう。

「大病後、虚煩して眠るを得ず。これ胆寒きが故なり」とあり、温胆湯という処方方が与えられている。この温胆湯は半夏、竹茹、枳実、橘皮、生姜、甘草から成っており、これと小異の同名方が『三因方』にもある。

また「虚勞、煩擾して、奔気胸中にあり眠るを得ず」に対しては酸棗湯が与えられている。酸棗仁、人參、桂心、生姜、石膏、茯苓、知母、甘草の八味からなる方剂であるが、『金匱要略』にも、「虚勞、虚煩して眠るを得ず」に対して同名異方が与えられている。これは酸棗仁、甘草、知母、茯苓、芎藭の五味から成っている。

興味深いのは、三世紀の嵇康の『養生論』において「人をして眠らしむ」の効を指摘されている楡と酸棗の二味のみの無名方が同じく「虚勞、眠るを得ず」に対して与えられていることである。

「心臓」篇の精神障害

冒頭に「心は神をつかさどる」とあるのをまつまでもなく、精神の座として心臓を考えたのは東西を問わず、古代医学の通則であった。

しかし『千金要方』においては、心臓に関連する精神障害の記載は本篇にはあまり記されておらず、次の「小腸腑」篇に多く見られるのが大きな特長である。その理由については後述する。実例を示そう。

「心実熱、驚夢喜笑恐畏悸懼不安」に対して竹瀝湯が与えられているが方剂の内容については省略する。

「心気不足、善く悲愁恚怒し、衄血し、面黄にして煩悶す。五心熱。あるいは独語して覚えず、喉咽病み、舌本強ばり、冷涎出ず。善く忘れ、恐る。走りて定らず。婦人崩中、面色赤し」というやや重症の精神障害も記されている。これには

茯苓補心湯という茯苓、桂心、大棗、紫石英、甘草、人參、赤小豆、麥門冬の八味から成る処方を用意されている。

現在の意味で重要なのは瀉心湯と称する二種の同名異方である。一つは現在言うところの半夏瀉心湯で、『傷寒論』でもこの名で出ており、いま一つは今日言うところの三黃瀉心湯で、『金匱要略』に瀉心湯の名で記されている処方である。

前者については、「老小下痢、水穀不消、腸中雷鳴、心下痞滿、乾嘔、不安」とあり、後者については、「心氣不定、吐血、衄血」とある。いずれも消化器症状と精神神経症状とを兼ねた内容となっており、今日の意味から見てもきわめて興味深い。

「小腸腑」の精神障害

精神障害の記載が最も多いのが、本篇であるというのは今日の常識からは理解に苦しむところであろう。これは中国の自然哲学上の理論である五行説で心と小腸が表裏の関係をなしていることによる。前述の如く「心臓」篇にも精神症状に言及している条文はあるが、同篇の記載の多くは主として形態としての心臓であり、今日言うところの狭心症や心筋梗塞を思わせるような記載もみられるのであり、心臓の機能である精神症状に関しては主として本篇に載せられているのである。

本篇で論じられる主要な症状に風眩がある。大人では癩と言ひ、小児では癩と言うが両者は元来同一のものであるという。この病気において、初発時には統命湯と火針による治療が賞用されるといふ。「諸風」の項において小統命湯という名の同名異方三種を記したが、ここにあげる統命湯も関連の処方である。

統命湯の適用例を次に示す。「風眩を發して、煩悶して意識を失ひ、口から涎沫を吐き、後弓反張し、目がつり上つて、牙関緊急をおこし、ものが言えない」場合がそれであるが、本方は竹瀝、生地黃、竜齒、生姜、防風、麻黃、防己、

附子、石膏、桂心から成り、三種の小続命湯と共通の生薬としては、麻黄、桂心、生姜、防己の四味がある。ここに記された症状よりすると癩癩の大発作の如く思われる。

本篇にはなお狂と称する病気についても記されている。「発狂すれば走ろうとしたり、自らを高賢とし、神聖と称したりする」というもので、精神分裂病と思われる。

また幻覚、妄想を次のように記している。「五邪気が人体中に入り、鬼を見て、妄語し、無いものを見たり聞いたりする。動悸がはげしく、あるいは恍惚状となるなど状態が定まらないもの」とあるのがそれで、これには茯神湯という茯神、人參、菖蒲、茯苓、赤小豆の五味から成る処方 が指示されている。

本篇中には「恍惚」という症状を記した条文が八例あり、その多くは精神分裂病とみられるが、中には老人性痴呆も含まれることと思われる。定心湯、鎮心湯などの名の処方が多く用意されており、これらを一々掲げることはないが、生薬としては人參、菖蒲、遠志、桂心などが多用されている。

「脾臓上篇」の精神障害

冒頭に「脾は意をつかさどる」とあるところより、脾の病気が精神障害と関連する可能性が示される。例えば、「脾寒、飲食消せず、勞倦氣脹し、噫氣がしきりに出、憂鬱になったり、怒りつぼくなったりして楽しまない」という状態には檳榔湯という檳榔、人參、茯苓、陳麴、厚朴、麥蘗、白朮、呉茱萸から成る処方が用意されている。西洋でも脾臓の病気は憂鬱、不機嫌などをおこすとされておき、現在でも spleen はそのような意味で使用されることもある。

「腎臓」の精神障害

冒頭に「腎は精をつかさどる」とある。『素問』では、人体の生長・老化を腎の機能の消長において述べている。すな

わち、特に生殖機能に力点をおきつつ、男子の場合は八歳毎に六四歳まで、女子では七歳毎に四九歳までの身体機能の変遷を腎機能の消長の対比において述べている。本篇では従つて性に関連する神経症や老人性痴呆と思われるような記載が見られる。

「虚勞で諸臓の精氣が不足し、夢精する」場合には棘刺丸が用意されている。また「腎氣が虚損し、五勞七傷に病み、腰脚がうずくように痛み、四肢の關節が痛み、眼がしょぼしょぼとして、喜怒の情がはげしく、恍惚状として気分が定まらず、寢ては夢が多く、覺めては口が乾き、食物に味が無く、いつも楽しくなく、怒りっぽく、房事に陰莖が立たず、心腹が脹満し、体中がしびれて痛み、酸っぱい水を吐き、下腹が冷え、残尿感があり、便通が思うようでない」という老人性痴呆を伴う症状には五補丸という処方が用意されている。

「消渴」の精神障害

消渴の多くは今日言うところの糖尿病であろうと思われる。本篇にも身体症状とともに精神症状に言及している例がある。たとえば「貞觀十年（六三六）に梓州刺史の李文博が白石英を永く服用していたところ、急に性欲がはげしくなり、月余を経てから口渴を訴え、更に数日経てから頻尿となり日夜で百行にも達した。いろいろな治療をしたが効無く、次第に増悪し、体がやせ衰え、起床ができなくなり、精神は恍惚状となり、口舌が焦げ、乾き、遂に死亡した」という例をあげている。そして、この種の例には枸杞湯が効果があると述べている。

むすび

以上、『千金要方』の中の精神症状を示す疾病を選び、その病態と治療について略述してみた。なお不備な点が多いと思われるが、今後さらに検討を重ねてみたいと思う。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所所長）